ラ・トローブ大学
プログラム

SUSAP 2024 SUMMER

2024.8.20~9.28

参加者プロフィール

黒岩もね(団長)
農学研究科修士２年

たくさんの人と仲良くなったりいろんなところに行ったり体験を大切にするひと！みんな頼りにしている存在です♡

安川晶(副団長)
理工学部３年

陰から支える副団長！
いなくなったと思ったらどこからともなく現れる不思議な先輩！頼りにしています！

中村晃之
農学部２年

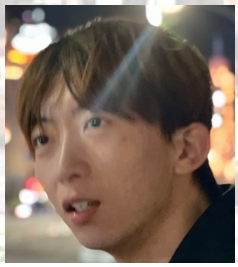
みんなで行ったオーストラリア留学。楽しかったハイキング。文化の違いを知った交流。この思い出は一生忘れません。

深江奏来
経済学部３年

１人でフラフラっとどこにでも行きます。熱中したことは、１日何時間でも没頭します。

森田直樹
理工学部３年

なんとか留学のきっぷを勝ち取った！高身長で見つけやすい！迷子になったら頼ってね。



吉村怜和
理工学部１年

しっかり者で、周囲からの信頼も厚い。どんな時も頼りになる存在で、みんなを引っ張る力強いキャラクターです。

甲斐隼
経済学部２年

明るさ満点、面白さ爆発、盛り上げ上手なイケメン！しっかり者で熱い男らしさもあり、どんな場でも頼れる存在。笑顔と熱意でみんなを引っ張る、魅力満載の男！

福田葵
農学部１年

明るくておしゃべり好き、おっちょこちょいでかわいさ全開！ちょっとドジだけど、その笑顔で周りを幸せにする、みんなのムードメーカーです！

平原あおい
農学部１年

元気いっぱい最強Ｗあおいのひとり。いつもニコニコムードメーカ！

加藤遥喜
農学部１年

運動が大好き！大好きなことに没頭！気になったことにはなんでも挑戦！

三善麟乃助
理工学部１年

明るくて楽しい雰囲気が魅力的！面白さと頼りがいを兼ね備え、笑顔でみんなを引き寄せる、ニヤニヤ代表です

プログラム概要

【期間】2024 年 8 月 20 日～9 月 28 日
【留学先】オーストラリア　ラ・トローブ大学
【内容】オーストラリアの海外協定校であるラトローブ大学の付属語学学校での英語コースに参加し、レベルにあったクラスで集中的に英語学習を行います。4 技能の授業が提供されるため高度な英語スキル向上を目指します。また、ホームステイという滞在形を通して、多民族国家であるオーストラリアの多様な文化や生活様式を体験することができます。

オーストラリアについて

オーストラリアは、美しい自然と多様な動植物が魅力の国です。観光地として有名なエアーズロックやグレート・バリア・リーフがあります。また、多文化社会で、都市部には移民が多く、さまざまな文化が共存しています。

ラ・トローブ大学について

メルボルンにある公立の大学で、世界の大学トップ 300、アジア・アセアン地域の大学トップ 50 の名門大学です。世界各地から生徒を集めており、金融・ファイナンス・投資系研究が特に有名です。

授業

プレイメントテストにより英語のクラスが level1～6 に分けられ、私たちはそのうち level2,3 に割り振られました。
Level2：月～木、9:00～15:00
Level3：月～金、10:00～15:00
サウジアラビアやアラブからの留学生と一緒に授業を受けました。グループワーク中心の授業が多く、4 技能全てを活用した形態となっていました。課題に対して意見を交わしたり、エッセイを書くにあたって文法や構成などを指摘しあったりもしました。約 30 日間の授業を経て、最終日にはテストとプレゼンテーションが課されました。

食事

オーストラリアの食文化は多文化的で、イギリス、イタリア、ギリシャ、アジアなどからの移民の影響を受けています。伝統的な料理としては、ビーフやラムのステーキ、オージーパイ（ミートパイ）、バーベキューが人気です。さらに、海に囲まれているためシーフードも豊富で、特にエビやオイスターが好まれます。

市場・物価

オーストラリアの物価は、特に食品や日用品が高めで、日本と比べると全体的に生活費が高い傾向にあります。オーストラリアの物価は日本の約 2 倍ほどでした。レストランでの外食や輸入品の価格は日本より高いことが多いです。一方、オーストラリアは最低賃金が高く、賃金に見合った物価と考えることもできます。

交通手段

登校する際は主にトラム(路面電車のようなもの)、電車、バス、の 3 つを利用しました。
マイキーカード(海外の交通 IC カード)を購入することで全ての公共交通機関を利用することができます。日本と違い、オーストラリアでは乗車時間によって運賃が変動します。

「多様性の大切さとは」

修士２年 黒岩もね

40 日間オーストラリアに滞在したことで、多様性を大切にすることが大きく分けて 3 つのことに繋がると感じました。「多様性はとても大事です」とここ数年でよく耳にするようになり、なぜ大切なのかを探るために、私は多文化社会であるオーストラリアへの留学を決意しました。

まず一つ目は、多様性を大切にすることで「物事を広い視野でとらえることができるようになる」ということです。そう感じた理由は、オーストラリアに住む人々がほとんどフレンドリーだということです。例えば、道を尋ねると笑顔で対応してくれます。さらに、“Have a nice day！”という一言まで付け加えてもらえます。お店に行っても同じように“How are you？”と必ず聞かれます。アメリカや韓国にはこのような文化がなかったので、このフレンドリーさは、多くの文化や人種が混じり合い、受け入れることのできるオーストラリアだからこそだと感じました。

二つ目に、「他の文化を知りたいと思う好奇心」に繋がると思います。今回の留学以前は、他国の文化について知りたいという気持ちがあまりありませんでしたが、この留学を経て多くのことを経験し気持ちが変わりました。その経験の中で、ビクトリア国立美術館を訪れた際のことが挙げられます。そこで私は二つのことに驚きました。一つ目は、世界各国のアート作品を見比べると、どれもルーツが同じように見えたことです。二つ目は、日本のアート作品がアジア作品の中でも唯一、区画が分けられていたことです。この経験に加えて、現地で出会った友人たちは日本のことをたくさん知っているのに、私は他国のことをあまり知らないという状況に恥ずかしくなりました。同じ人間が別の場所で育つことで、アートも変容している。そして、日本はその中でもとてもユニークで、そんな日本文化を誇りに思いました。それと同時に、現地の友達に日本の話をしてもらうととても嬉しかったので、別の文化について深く知ることで、将来的に世界各国の人と対等に会話ができるようになりたいと思いました。

三つ目に、「新しい考えを生み出す創造力」に繋がると思いました。なぜなら、たくさんの文化と触れ合うことで、常識が消されたからです。イスラム教、キリスト教、仏教などの宗教や、交通機関の仕組みの違い。会話の最中の表現の違い、お店の営業時間など、留学をしなければ気付かなかったアイデアを吸収することができました。

多文化社会を体感することで、これまで以上に等身大の自分と柔軟に新たな考えを受け入れられるようになりました。来年からは、枠組みにとらわれずに視点を大きくとらえ、常識を覆していくような社会人に成長していきたいです。

写真 1
豪州のボランティア精神は日本より強い！

写真 2
モネの絵とソーショット

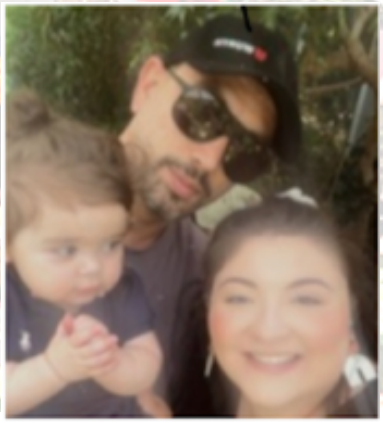
写真 3
クラスメイトとのディナー

「この短期留学を振り返って」

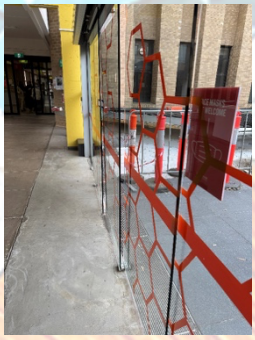
理工学部３年 安川晶

今回の短期留学に対し，私は以下の目標を立てていた．高い英語力の習得，その国の文化や考え方の理解，そして日本との相違点や問題点の発見の３つである．私は，この３つの目標を達成するために生活してきた．

高度な英語語学力を獲得するためには，日本語を一切用いず英語のみを使って，会話することが最も効果的だと考えている．そのため，今回の留学前には一通り会話ができるように，特にリスニングとスピーキングに力を入れて勉強を行っていた．しかし，現地ではなかなか伝わらず，また相手が何を伝えたいのかも曖昧であった．特に，今回の留学ではホームステイを経験することができ，ステイファミリーなどとの会話をする場面がほとんどであったため，食事を取るときや入浴をするとき，どこに行くのか，何時までに帰宅するのかを英語のみで伝える必要がある．さらに，今回の留学は英語留学であるため，平日は大学に通学し英語を学んでいた．最初は何を言っているのか，どの様に話せば伝わるのかが分からない状態であった．しかし，リスニングやスピーキングとは関係ないように思っていた英語文法やリーディングを学ぶうちに，英語の形が理解できるようになり，どの様な語順で話しているのか，どの様な文脈で話せばよいのかが分かるようになってくる．そのようになると，相手の言いたいこと，自分の伝えたいことが伝わるようになり，会話を成立させることができた．憂鬱だった英語を用いた会話も楽しいと感じるようになり，最終的にもっと話したいと思えるようになった．英語で会話できるようになるためには，まず英語の基本的単語と文法，発音を理解し，会話を楽しむことが大切で，それらによって上達するのだと思い知った．

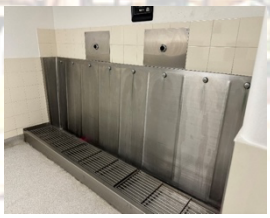


メルボルンの文化は日本で私が考えていたものとは明確に違った形で確立していた．海外だと当たり前に存在すると思っていたチップ文化は無く，現金非対応でクレジットカード決済のみの店が多くキャッシュレス化がかなり進行していた．また，考え方も違うようだった．よく言えばおおらか，悪く言えば雑といえる．特に驚いたのが自動ドアだ．この写真は大学の建物の入り口の自動ドアなのだが，物凄く隙間が空いており今にも外れそうであった．私は８，９月に留学したためメルボルンでは丁度冬であり，その時の寒い隙間風は今でも覚えている．そのうえ，ここのみがおかしいのではなく，大学の自動ドアのほとんどがこの様であった．メルボルンは様々な人が暮らす多国籍文化であるため，多少の物事に許容しなくてはならないのは，分かっていたが，日本で生活する自身から見たらあまりにも雑に思えた．



この留学で感じた日本とメルボルンの違いは，主に衛生環境の認識，そして現地人の性格差異だった．衛生環境はやはり日本の方が優れている．それを実に実感させられた留学であった．男子トイレの小便器は壁であるし，ウォシュレットはもちろん無い．

多国籍文化では様々な人が集まり，コミュニティを形成する．文化レベル，認識が異なる人たちと共に生活する為には物事の曖昧さ，どれだけ許容するか，が大切になると考えている．しかし，曖昧にしすぎたり，許容しすぎたりすると，民度が下がりマナーも清潔さもない小汚い社会になっていくだろう．私は，メルボルンの社会をそのように感じた．アボリジニの文化が消え去り，英国植民地時代の文化もじわじわと消え去っている印象が強かった．文化の融合は新たなる文化をもたらす．しかし，文化というのは多少の秩序があってこその文化である．秩序なき文化は荒野と変わらない．護るべき一線は護り通さなければならない．



「オーストラリア留学を経て」

経済学部 2 年 甲斐隼

オーストラリアでの 40 日間の滞在は、私にとって非常に多くのことを学び、感じさせてくれた貴重な経験でした。特に、オーストラリアの多文化社会に触れ、アラブ首長国連邦（UAE）から来ていた学生たちと親しくなり、また休日に訪れた古着屋での発見が、私の滞在をさらに特別なものにしました。

まず、オーストラリアの多文化社会に関してですが、この国は非常に多様な文化が共存している場所です。街を歩いていると、さまざまな人々の顔が見かけられ、どこに行っても異なる人います。シドニーやメルボルンのような大都市では、移民が大勢を占めており、その影響が街の風景や文化に色濃く反映されています。レストランでの食事も、多国籍料理が揃っており、まるで世界を旅しているかのような感覚を味わうことができます。オーストラリアの人々は、多様な文化を受け入れ、尊重する姿勢を持っており、そこに暮らす人々の違いを祝福する気風が感じられました。

現地でともに授業を受けたアラブ首長国連邦（UAE）から来た学生たちとの出会いも、私の滞在を特別なものにしました。最初は言葉や文化の違いに戸惑うこともありましたが、共通の授業を通じて少しずつ打ち解けていきました。彼らは非常に礼儀正しく、親しみやすく、互いに助け合う姿勢を大切にしていました。授業後には、UAE 付近の郷土料理を振舞ってくれたり、一緒に日本や UAE の慣習について話合い、楽しんだりすることが多かったです。彼らが持っていた独自の視点や価値観を知ることで、私は自分の考え方がより広がり、視野が深くなったと感じました。UAE の学生たちは、伝統的な文化を大切にしつつも、オーストラリアの自由な雰囲気にも順応している様子が印象的でした。私たちの交流を通じて、国や文化を超えて人々が共感し、理解し合うことの大切さを改めて感じました。

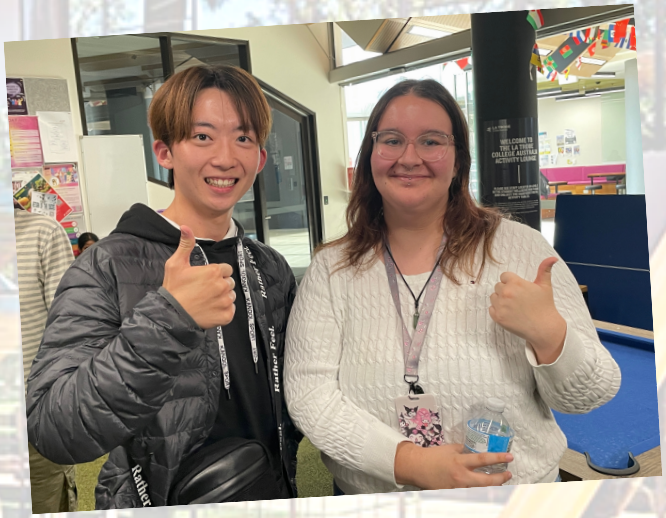
休日には、シドニーやメルボルンの街を歩きながら、古着屋巡りを楽しみました。オーストラリアの古着屋は、まるで宝探しのような場所であり、ユニークなアイテムがたくさん揃っています。特にシドニーのイーストシドニーやメルボルンのフィッツロイエリアには、個性的な古着屋がひしめいており、どこを見ても新しい発見があります。私は、色とりどりの古着やビンテージアイテムを見つけるたびにワクワクしました。中でも、年代物のデニムジャケットや、少しユニークなデザインの T シャツは、まさに「一品物」の宝物でした。これらの古着を通じて、オーストラリアのファッション文化や、古着の持つ歴史やストーリーにも触れることができ、非常に面白い体験でした。財布の紐がついついゆるんでしまいました。

また、古着屋で買ったアイテムを身につけることで、現地の人々との会話が生まれることもありました。ある日、古着屋で買ったヴィンテージのシャツを着て街を歩いていたところ、オーストラリアでできた友人とその T シャツについて話すことになり、意気投合しました。彼も古着が好きだということで、共通の趣味を通じてすぐに打ち解けることができました。このような些細な出来事が、異国での生活を豊かにしてくれると感じました。

40 日間のオーストラリアでの滞在は、私にとって単なる異文化体験にとどまらず、自分自身の人生に対する新たな発見となりました。多文化社会の中で異なる背景を持つ人々と交流する中で、自分がどれだけ柔軟に新しい価値観を受け入れ、理解し合えるかを実感しました。また、古着屋での買い物や現地の人々とのふれあいを通じて、物の価値や人とのつながりがどれほど私にとって重要であるかを再認識しました。物の背景や歴史を知り、そこから感じ取るストーリーに心が動かされ、どんな小さな経験も自分の人生において大きな意味を持つことを学びました。これらの経験は、私がこれからどんな場所にいても、どんな人と出会っても、自分らしく生きるための力を与えてくれるものだと確信しています。

「オーストラリア留学の 40 日間」

理工学部 1 年　吉村怜和



大学 1 年生の夏休み、私はオーストラリアに 40 日間の留学を果たしました。この責な体験は、単なる話学学習にとどまらず、文化的な交流や人間関係の構築においても深い意味を持つものでした。

留学中、私はラトローブ大学に通い、授業を受けることがメインの活動でした。講義では、英語のスキルを磨くための実践的な学習が行われており、クラスメートとのディスカッションを通じて異なる視点を知ることができました。しかし、授業終了後の時間こそが、私にとって最も価値のある瞬間でした。オーストラリアの友人たちと共にメルボルンの市内を探索し、映画を観たり、カラオケをしたり、地の料理を味わったりすることで、異文化への理解を深めていきました。

特に印象に残っているのは、Language Festival というイベントへの参加です。このイベントには、さまざまな国からの人々が集まり、多様な言語や文化について語り合いました。ここでは、英語を介して他国の人々と交流する楽しさを実感しました。多様な価値観やライフスタイルに触れることで、私の視野は大いに広がりました。

ホームステイを通じての経験も、私にとって大切な財産となりました。ホストマザーや同居人のベトナム人と親しくなる中で、彼らのバックグラウンドや日常生活を知ることができ、国境を越えた友情が芽生えました。彼らが自らの努力で英識を学び、異文化を受け入れている姿には、私自身も大いに刺数を受けました。

この学を通じて、言話の壁を越えることがいかに重要であるか、そしてそれが可能であることを学びました。海外の人々がどのようにして自らの言語能力を向上させようとしているのか、その努力を間近に見たことは、私にとって何物にも代えがたい経験でした。

オーストラリアでの 40 日間は、ただの留学にとどまらず、自己成長と国際理解の旅となりました。この責重な経験を基に、今後も異文化交流を続け、自らの視野を広げていきたいと強く思います。

「オーストラリア留学を振り返って」

農学部１年 福田葵

私はオーストラリアに興味を持ったきっかけは様々な動物がいるからだった。実際にオーストラリアで過ごして野生のカラフルなインコや初めて見たコアラに驚いた。メルボルン動物園やサファリパークに行ったことで多くの動物を見ることができたことがうれしかったが、それ以上に記憶に残っているのが日本の動物園との違いだった。それは日本の動物園より一匹に対する飼育面積が大きいことだった。動物がまるで自然にいるかのようで窮屈な感じが全くなかった。日本で動物園に行った時には、動物が窮屈そうに過ごしているとは思わなかったけどオーストラリアで動物園のあるべき姿を学んだような気がした。なるべく動物にストレスがない動物園を造るべきだと思った。私は農学部で動物について考える機会が多くあるがオーストラリアに行って動物に与えるストレスについて深く考えた経験を生かして自分の意見を主張していきたいと思う。

また、私がオーストラリアに行って多文化社会とはどういうものか知れた。今まで社会の授業などによく出てくるキーワード（多文化社会）は日本もそういう社会だと思っていた。だが、多文化社会と言われるオーストラリアに行って様々な国の人が当たり前のようにいて、誰もが自分とは違う文化を受け入れる気持ちがあったのが日本人とは違うと感じました。

わたしは今まで人種で差別はしないことが多文化だと思っていましたが、今回オーストラリアで身近に多文化社会を感じたことで、多文化社会とは自分の国とほかの国の人で線引きをせず同じ国に住んでいる人として認識することだとわかった。

最後に（自分の視野を広げるため）というオーストラリアに行く前に掲げた目標について話したいと思う。40 日間ホームステイで過ごしたことで様々な苦労があった。自分の実家と一人暮らしの経験しかない私は、他人の家で過ごすことに慣れなく悩みながら過ごしていた。マザーはたくさん食べさせてくれるけど、たくさんの量を食べられないことだけでも申し訳なく感じたり、マザーに伝えたつもりがうまく英語が話せなくて伝わらず怒られたり、日本で暮らしているのとは違うギャップで苦しんでいた。マザーは日本人のイメージが悪いと言っていたので英語が話せない日本人の私に意地悪をしていると感じていた。だが、意見をはっきり言うことで自分のことを伝えられるようになりマザーも理解しようとしてくれた。マザーは自分が一番正しいと考えていて人の意見を聞かずに怒ってくる人だと認識し、留学終盤はマザーに期待しないことで悩まずに過ごせた。人に期待しないことは、普段の生活にも生かせた。私たちの感覚では時間を守ることは当たり前だけれどほかの国の人に時間通りに来ることを期待しないことでトラブルを避けることができた。日本に帰って日本人同士の関わりでも他人に期待せずに過ごしたいと思う。この気持ちの面から自分の考え方の視野が広がったと考える。

「オーストラリア留学を振り返って」

農学部１年 平原あおい

私が SUSAP でオーストラリアに行こうと思った理由は、英語力を高めたい、他の国の文化を知りたいと思っていたからです。また、日常に刺激がほしかったというのもあります。大学の授業に行って、バイト行って、家に帰ってだらだらという生活に嫌気がさしていたので、何か新しいことに挑戦して、自分の価値観が広がるような経験をしたいなと思っていました。

まず初めにホームステイについてです。私のホストマザーは、中国出身の方で、生活スタイルや食事も日本に似ていて、過ごしやすかったです。1番違ったなと感じたのは、オーストラリアでは朝早くから活動し、夜は早く寝るという生活スタイルだったことです。夜ご飯の時間は１７：３０で、食べ終わったら少しおしゃべりして、部屋に戻って自分の時間を過ごし、22：00 くらいにはみんな寝ているという感じでした。他の国からきた留学生も一緒で夜ご飯の時は和気あいあいとした雰囲気で楽しかったです。

次に大学生活についてです。英語のクラスは、ドバイやサウジアラビアからやってきたアラブ人と一緒でした。授業では英語でお互いの文化について交流しました。馬に乗ったり、車で砂漠を駆け回ったり、ハヤブサと遊んだり、私たちの生活と全然違う話が聞けてとても面白かったです。放課後にはカプサというアラブの伝統料理をふるまってくれたり、楽器を演奏しながら歌を歌ってくれたりしました。カプサはカレー風味で鶏肉がごろっと入って非常においしかったです。アラブの人はこれを手ですくいながら食べるのですが、実際にしてみるととても難しく大変でした。

休みの日には自分のバディとシティに出かけたり、車で遠くののどかな町に連れてってもらったり、動物園に出かけたりしました。最初は緊張してうまく話すことができなかったけど、ゆっくりでいいよと優しく、最後まで理解しようとしてくれて、自分なりに話すことができるようになりました。

最後に、私はこの SUSAP に参加するかどうかとても迷ったけど、参加してよかったなと思います。これまで英語に話すということに恥ずかしさと抵抗感があったけど、この 40 日間を通してペラペラとは話せないけど、自分の持っている語彙でどうにか伝えようという積極的な考え、姿勢に変わりました。また、英語の勉強に対するモチベーションがさらに上がりました。自分の英語力が乏しかったせいで相手の話を理解できなかったり、自分の考えを 100 パーセント伝えきれなかったり、どこかもどかしさがありました。もっとしゃべりたい、もっと伝えたいという思いが高まり、もっと英語を勉強しようと思いました。

「SUSAP 2024 成果報告書」

理工学部 3 年 森田直樹

私はSUSAPオーストラリアプログラムに参加し,メルボルンへ留学した.これは私にとって初めての海外渡航であり,日本では知ることが出来ない様々なことを学んだ.

メルボルンではLa・Trobe大学に通学し,主に英語を学習した.平日は大学で4時間,英語の授業を受講した.オーストラリアの主要言語は英語なので,授業ももちろん英語で行われた.英語で授業を受けるのは初めてで,序盤は慣れない環境に苦労したが,毎日英語に触れることで徐々に慣れることが出来た.留学前は英語での会話に抵抗があったが,留学を通じて英語に対する不安を取り払えたことは非常に大きな成果だと思う.クラスにはサウジアラビアやUAEからの留学生もおり,彼らと英語でコミュニケーションを取ることでイスラム圏の文化についても知ることができた,

大学ではバディをはじめとする現地の学生たちが私たちの生活をサポートしてくれた.彼らと英語で交流しながら一緒に食事をしたり,動物園や美術館,マーケットなどに出かけたりした.また,一緒にビリヤード(現地ではプールと呼ぶことが多い)で遊ぶこともあった.彼らのサポートのおかげで楽しい時間を過ごすことができ,オーストラリアの文化にも触れることができた.留学中に出来た友人とはSNSを通じてやり取りをしたり,通話を繋げてゲームをしたりして現在でも交流している.彼らとの関係は今後も大事にしていきたいと考えている.

また,オーストラリアの文化はホームステイでも知ることが出来た.私が留学した家庭は両親と10歳前後の子ども2人の4人家族であった.彼らとは一緒にゲームをしたり,家あったピアノを弾いたり,ハイキングに行くなどして交流した. 個人的には海外はシャワーが主流で湯船に入れなかったのが少し辛かったが,オーストラリアの日常を知ることができ,非常に有意義なホームステイであった.

オーストラリアは多民族国家であり,人口のほとんどを日本人が占める日本とは大きく異なる文化を持つ.様々な人種・宗教の人々が共生しており,街でもアジア系,ヨーロッパ系をはじめとする多様な人々と出会った.私は多民族国家では宗教的な対立が多いのではないかと考えていたが,少なくとも滞在中にそのような対立を見ることはなかった.メルボルンは基本的に治安が良く,街で危険な出来事に遭遇することはほとんどなかったように思う.違ったルーツや文化を持つ人々が互いに価値観の違いを認め,多文化共生を実現する姿は非常に魅力的で素晴しいと感じた.私もオーストラリアの人々のように異文化に対する理解を深め,多様性に対する意識を高めていきたい.

最後に目標の 1 つとしていた英語力の向上について触れる.先述の通りLa・Trobe大学での授業を通じて英語に対する抵抗をなくすことができた.また,現地の人々との交流で英語での会話に慣れることが出来た.渡航前の目標にTOEIC700 点以上を挙げていたが,帰国直前のCASECスコアはTOEIC650点相当であった.この結果は語彙力が不足しているためだと考えている.今後も学習を続け,ボキャブラリーを増やすなどして英語力の向上に努めていきたい.

写真：メルボルンの夜明け

「オーストラリアで学んだこと」

経済学部 3 年 深江奏来

僕がオーストラリアでの 40 日間を経て、様々なことを学びました。そもそも僕が、このプログラムに参加しようと思った理由は、自分のスピーキング・リスニング力の向上と TOEIC の点数の向上のためでした。事前研修の段階では、注意喚起が多く、怖いところなのかなと感じていましたが、実際に行ってみて考え方が変わりました。オーストラリアには、本当に多くの国籍の人が住んでいて、みんなフレンドリーに接してくれました。

一番楽しかったことは、ホストファミリーとオーストラリアンフットボールを見に行ったことです。日本でもスポーツを見に行くことがとても多いですが、日本とはまた違った会場の雰囲気に感動しました。MCG（メルボルン・クリケット・グラウンド）は、クリケット用のグラウンドですが、オーストラリアンフットボールの競技会場としてもよく使われるそうです。まず、スタジアムの大きさが日本のスタジアムの比にならないくらい大きかったです。MCG は、約 10 万人を収容することができ、半周するのに相当な時間がかかりました。会場外での盛り上がり方も日本と違いました。電車の中にも多くのサポーターがいて、みんなで好きなチームの応援歌を歌ったりしていました。日本では見ることができない光景をみることができました。他にもバディとの交流も印象的でした。一緒にランチを食べながら、お互いの国の話や趣味の話を楽しみました。メルボルンおすすめの観光スポットを教えてもらったり、サッカーの話をして盛り上がったりすることができました。最初は、自分の英語が通じるか心配だったけど、思った以上に自分の意見を伝えられたのかなと思いました。僕のバディは、日本が好きということもあって、日本語を教えたり、日本に来る際のおすすめスポットを教えたりしました。逆に、僕が分からない英単語を聞いたりしました。最後のパーティでは、日本でまた会うことを約束しました。

オーストラリアで学んだことは、日本がいかに恵まれているかということです。例えば、物の値段が日本よりはるかに高く、支出が予想以上に大きかったです。髭剃りが 70 ドル（約 7000 円）くらいして（しかもあまり剃れませんでした。）、水が自販機で買うと、3.5 ドル（約 350 円）かかりました。質が良くて、値段も安い日本の商品がいかにありがたいかよく分かりました。また、シティの様子も日本と比べて、大きく異なっていました。一番印象に残っているのは、街中でのホームレスの数です。日本でホームレスを見かけることはほとんどないですが、メルボルンには、多くのホームレスが街中にいました。老人が特に多かったですが、中には自分と同じくらいの年齢の人もいて、衝撃を受けました。

このオーストラリアでの生活を経て、英語の能力が向上しただけではなく、お互いの文化を認め合うことの大切さを学びました。オーストラリアには、多くの人種がいますが、日本について好印象を持っている人が多くいました。こちらも相手が言われて嫌なことは何か、どのように接すれば良いか考えることが出来たと思います。

「オーストラリア留学で得た学び」

農学部２年 中村晃之

8 月 20 日から 9 月 28 日の間、私はオーストラリアのメルボルン郊外にあるラトローブ大学へ交換留学生として約 5 週間通った。平日には毎日授業があり、放課後や週末は様々な経験をした。そのような留学で得ることができた学びや気づきについて日本との違いと自然環境の 2 つの観点から述べていこうと思う。

1. 日本との違い

① 食事

私はオーストラリアではホームステイをして暮らしていたため、最も食事を共にしたのはホームステイ先の人たちだ。私のホームステイ先の人はベトナム人であった。だが毎食ベトナム料理というわけではなくむしろベトナム料理を食べる頻度は少なかったように感じられる。自宅で食べる夕食では主食一つ、主菜一つのシンプルなものが多かった。しかし主菜が様々であった。肉に関しては鶏、豚、牛はもちろん鴨や羊などがでることもあった。魚料理もでることはあったが生魚を食す文化がないためかすべて焼き魚であった。飲食店で食事をとることもあった。一回の食事にかかる金額は日本と比べて高かった。日本での食事が一人当たり 1000 円から 2000 円程度だとしてオーストラリアでは 3000 円から 5000 円であった。飲み物や席料などもあるので実際はもっと高くなることもある。料理については様々な国の料理があった。最も多くみられたのはイタリア料理と中国料理である。どちらもコース料理から一品料理など様々な料理があり多くの人がいた。

② 衛生・治安

オーストラリアは日本と異なり乾燥しているため汚れが目立ちにくい。そのため多少の汚れは気にしない人が多いように思えた。学校生活は基本的に清潔であったと思う。しかし日本とトイレの形式が異なるためかトイレはあれていることが多かった。また、放課後メルボルン市へ行くことがあったが市に近づくにつれ駅の汚さや道の荒さが目立つようになってきた。オーストラリアには多くのごみ箱が路上に設置されてある。ごみ箱が満杯になっていてもごみを近場に置く人がいるのでごみ箱周りは汚いことが多い。メルボルン市内ではホームレスが多くみられた。歩いているとお店の前などに段ボールを敷いて寝ているホームレスが多くみられた。ホームレスのためにボランティア活動をしている人もいた。日本ではそもそもホームレスを見かけることが少ないので多くの人がホームレスの人がいることを当たり前に感じていることに驚いた。また夜になるとパトロールの警察官が多くみられた。

③ 運動

オーストラリアでは運動しやすい環境にあると思える。多くの人が健康のために自主的に運動することを選択していた。日本よりもジムに通っている学生が多くいたり、週末にスイミングに行ったり、ビーチでランニングやサイクリングをしている人がいたりと日本よりも活動的な人が多い印象であった※1。これは日本よりも医療にかかる費用が高いことが関わっていると思う。日本では体調が悪くなっても比較的安く医者に診療してもらうことができる。しかし日本より物価が高いオーストラリアでは日本ほど安くはない。そのためそもそも体調不良にならないようにすることのお金をかけている印象だった。健康のために食事を意識している人もいた。

2. 自然環境

オーストラリアでの生活では週末や放課後にはいろいろなところに出かけた。その中でも自分が積極的に感じようとした自然環境について述べていく。オーストラリアの気候は場所によってさまざまである。西側は亜熱帯性気候、中央は熱帯と砂漠気候、北側は熱帯雨林気候、南側は温帯性気候というように国土の大きさのために地域による差が激しい。私が暮らしたメルボルンはオーストラリアの南部に位置するので温帯性気候である。その中でも西岸海洋性気候に区分される。そのため急な激しい雨が降ったのちに快晴などの天気になり頻繁に虹が見られた※2。休日にはハイキングなどに出かけると、自然の違いを実感する※3。気候帯の違いから植生の違いにつながるのを実体験できてよかったと思う。オーストラリアは土地の性質のために人の住むことができるエリアが限定されている。そのため局所的に人口が集中している。メルボルンやシドニーはその例である。国土のほとんどを砂漠に覆われているので面積に対する人口はおらず、また人口密度は低い。シドニーでビーチに行った際多くの人がサーフィンを楽しんでいた。私が行ったビーチはシドニーでも有名なビーチで水の透明度が非常に高く多くの人でにぎわっていた。メルボルンからシドニーは飛行機で 1 時間ほど北上するだけだが、気温が大きく異なる。メルボルンは冬の終わりごろから春先にかける時期であったためまだ寒さを感じることが多くあり厚着をする人も多くみられたが、シドニーでは冬の印象はなくむしろ夏のようであった。そこでは半袖で過ごす人や上裸で過ごす人もいた。シドニーでは一年中そのように高い気温を保つのでコートなどの厚着を持つ人が少ないらしい。たしかに過ごしやすい場所だと思った。

※１

※２

※３

「最高」

理工学部１年 三善麟乃助

今回のオーストラリア短期留学を通して、学習面だけでなく文化や社会問題などについても学ぶ機会が多くあった。これから、オーストラリアで体験した英語学習、文化交流、社会問題、の３つに絞って話していきたい。

一つ目の英語学習について、40 日間を通してオーストラリアの授業を体験したが、TV やネットでも言われている通り、日本の授業形式とは全くの別物だった。日本は文法や語彙を増やしどのように問題を解くかに重視した授業が多いように感じる。一方オーストラリアでは授業自体が、自由に発言し意見を交流する場となっており、英語を実用的に学ばせる形式だった。いかに自分の考えを言葉にして相手に伝えるかを重視しているように感じた。また、ホームステイということもあり、短期留学が終わる頃には日常会話におけるリスニングは不便なくこなすことができた。

二つ目の文化交流では、ラ・トローブ大学が主催する welcome party などでさまざまな人々と交流することができた。また、メルボルンでは Japanese festival や language exchange festival など日本をテーマにした交流会なども行われていた。積極的にこのような場に参加することで、国境を超え友達の輪を広げるという留学前の目標も達成することができた。また、ホストマザーがドイツ出身の方だったり、友達も中国人や韓国人だったり、オーストラリアだけでなく世界の考え方や文化に触れることもできた。この交流を終えて、他国に向ける考え方だけでなく、日本の食事やアニメ、漫画といった文化が世界から注目されていることにも気づくことができた。

最後に社会問題についてである。日本と違い、街中に出ると当たり前のようにホームレスの方々が生活しており、その中でも物乞いを見かけた時は衝撃的だった。今までネット上でしか見かけることはなく直接関わりのないものだった。実際に目にして、友達からも彼らに対しての考え方や接し方を聞いて、他人事ではなくタイミングによって自分もなりうることを理解した。他にも、実際にアジア人差別に遭うことや、休日に道路封鎖まで行われる大きなデモも経験することができた。実際に表情などを目で見て、雰囲気を肌で感じることで、多様性が強調されているオーストラリアでもこのようなことが起きているのだと実感した。

最初は英語学習の向上や友達づくりを意識した留学だったが、文化はもちろん、今起きている問題や他国から見た日本についても学ぶことのできた貴重な時間だった。留学メンバーとも世代を超えて仲良くなることができ、初めてに海外で最高の思い出を作ることができた。

リーダーのもねさんをはじめ、グループメンバー全員のおかげで最高の思い出を作ることができました。みんなで協力しながらいろんな場所を巡り自分たちだけでやり遂げたシドニー旅行など最高の 40 日間でした！

「今回の研修の振り返り」

農学部 1 年 加藤遥喜

今回の SUSAP が私にとって初めて海外に行く機会でした。オーストラリアに行くまでは自分が海外で生活できるのかすごく不安を感じていました。しかし、いざ行ってみると私が持つ考えが 180 度変わったように思います。初日には横断歩道を渡る際にボタンを押すのを忘れ、バスに乗り遅れた際に通りかかった人が声をかけてくれました。これをきっかけに私はオーストラリアの人が大好きになりました。私は学校以外の時間の大半は 2 人のバディと過ごしていました。1 人とは、週二回ボルダリングに行っていました。日本でもボルダリングを何回かやっていたので、バディにボルダリングに連れて行ってもらう約束をしていました。実際にボルダリングジムに行くと日本よりもたくさんの人がいました。私はバディに教えてもらうことが多かったですが、他にも現地の人に教えてもらうこともありいい交流することができました。私が日本人とわかると日本語で話しかけてくれる人もいました。私ははじめ、英話で人に話しかけることに抵抗がありました。自分の英話は正しくなく、通じないと思って話す勇気がありませんでした。しかし、いろいろな人と話してみるうちに別に正しい英語を話す必要はないと感じました。そう思うようになってから、私はためらいなく人と話すようになりました。また、もう一人とのバディとはいろいろな場所に行きました。バディが車を持っていたので遠くの場所にも連れて行ってくれました。オーストラリアならではのとても広い牧場や風景、建物を見ることができました。

私がこのようにたくさんの人と関わり、いい思い出や学びを得ることができたのは、出会いを大切にしていたからだと思います。日本にいるうちからバディと連絡を取りオーストラリアではどんなことをしたいのかを話していました。人と話すことで得ることができる楽しさを学びました。しかし、私の英語力が低いため伝えたいことが伝わらないことも何度もありました。そのため、より一層英語を勉強するモチベーションが上がりました。

今度バディと会うときには自分の考えをしっかりと伝えることができるようになりたいです。今回の研修を経て、自分の持っている考えやモチベーションに変化がありました。これからもたくさんの人と交流し、新しいことを学んでいきたいです。

International Arrivals
MINI MEGA MODEL MUSEUM
Menty Gorge Park